

趣味を始めたきっかけは何ですか？

1980年の秋、西オーストラリアのパースを訪ねたとき、キングsparkというところに変わった植物がたくさんあり、写真を撮りまくっていましたが、フィルムがなくなりました。そのとき、たまたま持っていたクレヨンでカンガルーポーという鮮やかな赤とグリーンの植物を描いてみました。初めてにしてはまあまあ出来で気をよくしたのですが、それよりも短い時間ですが描くために対象物をじっと眺めたことに新鮮な感動を覚えました。考えてみると、我々の日常生活でもものを10分以上見つめるということはありません。まして写真では一瞬です。描いた絵は人様に見せられるものではありませんが、絵を見るとそのときの感動が蘇ってくるのです。これがやみつきの始まりです。

それ以来、クレヨンが油絵にさらに水彩にと変遷を経て今の風景水彩スケッチに落ち着きました。風景水彩スケッチには、F3のスケッチブック、プラスチックのパレット、サインペン、筆とペットボトルの水さえあれば用が足り、これらは折りたたみ椅子とともに普通の手提げカバンに収まるので、仕事に出るふりをして絵を描きに行っても疑われなくて済みます。実際は国内外各地で学会や会議を抜け出してスケッチしているところを多くの知人に見られ身の縮む思いもたびたびしましたが、皆さん暖かく見守っていただきました。

趣味の経歴、最近の様子を紹介して下さい。

私の絵は全く我流の風景水彩スケッチです。50歳を越えた1980年からですから、かれこれ30年になります。風景スケッチで一番重要なことは、これはと思う対象に出くわしたとき、ためらわずそこに座り込むことです。田舎とか人通りの少ないところであれば全然問題ありませんが、人通りの多い街中で座り込むには相当な勇気が必要です。恥ずかしいので人目につかない場所を探すのですが、そこからの風景は先の印象とは全く異なるのです。それはいいなあと思った印象は雑踏を含めたその場の環境を構成するすべてによるものであり、それらの要素の一部でも欠ければ駄目なのです。多くの場合、雑踏の中でも人ひとり座り込むスペースはなんとかなるものです。乞食になったと思えばなんでもありません。実際にウィーンの街角で乞食に間違われ小銭の恵を受けたこともありました。座り込んでしまえばあとはこっちのものです。対象によりますが、スケッチを仕上げるのに早くても30分、込み入っている場合には1時間ぐらいかかります。この間、通り過ぎる多くの人の視線にさらされますが、座った低い位置から見る通行人や街の風景が面白く、乞食は結構楽しんでいることがわかりました。これはという対象を見つけ座り込んで描きな



スナップ写真：パリ、サン・ラザール駅前にて



水彩スケッチ：ヴェネツィア

ぐるときの気持ちの昂ぶりは特別のものがあります。昔、研究で見いだした新事実に興奮し論文原稿を書きながったのに通じるものがあります。この高揚感を味わうために現場でのスケッチにこだわっていると言えます。

下手な絵でおこがましいのですが、毎年、東京で個展を開いていまして、今年で10回になります。毎回、多くの方においでいただき、最近では1週間の会期中に600名を超える来場者があり、また年1回旧知の方にお会いする貴重な場になっています。添付した写真は2003年の個展の案内状の水彩スケッチです。個展のほか、5冊の画集、2冊の画文集を出版し*、一応の成果は挙げたと思っています。

化学の仕事に役立つことはありますか？

基礎研究をやっていた頃、スケッチを楽しんでいるとき、研究面で思い悩んでいたことがアーそうだったのかと気づき、その後意外な展開をしたことが再々ありました。これは絵に限りませんが、我々は仕事から離れていても抱えている問題を常に考え続けていて、仕事以外の異質の行為に触発されるのではないのでしょうか。このような経験から、現役時代から仕事以外に打ち込めるものを持つことは仕事にも大いにプラスだと思います。

*画集、画文集は名古屋大学大学院理学研究科、岡本祐幸教授のホームページ <http://jegog.phys.nagoya-u.ac.jp/~okamoto/Ito/ito.html> でご覧になれます。



伊藤光男 Mitsuo ITO
東北大学名誉教授、日本化学会名誉会員、元分子科学研究所長
【専門】分子分光学
E-mail: itomt@xd5.so-net.ne.jp